



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER
第 21 号 2011/06/15

発行所 英 国王立写真協会 日本支部
〒 107-0051
東京都港区元赤坂 1-7-10
元赤坂ビル 9F
Tel 03-5413-7829
Fax 03-5413-7410
E-mail : yoshi-rpsj@hotmail.co.jp
発行人 豊田芳州 編集人 川村賢一

<http://www.rps-japan.org>

Feel British?



ロンドン展望 (林 喜一)



Scotland Yard (林 喜一)



Afternoon Tea "Free Chat" (高原 直哉)



Afternoon Tea "Delightful" (高原 直哉)

続報 第 9 回日本支部写真展

今年も 長崎で 巡回展

昨年に引き続き、今回も支部展は長崎に送られ、6月11日~7月8日の日程で、長崎歴史博物館にて巡回展の開催が決定した。

昨年は、「龍馬と彦馬、維新のまなざし」の特別展のロビーギャラリーでの展示で、2000名超の来場者があった。

今年は「知られざる日本写真開拓史」展の開催と合わせての展示となる。歴史的に写真への関心が深い長崎であり、「Feel British?」展へも多くの人が熱いまなざしを向けてくれるものと期待している。

長崎歴史博物館



第6回 リレートーク研修会



2010年10月30日、東京六本木「霞会館」にて、リレートーク第6回研修会(担当:川村会員)を開催する。前回、三宅会員のトークで、英国での生活体験が披露されたのを受け、今回は一般庶民の生活を中心に、同時期ロンドンの建築設計事務所での勤務、RPSとの出合など、5年の生活体験を通して感じた英国のイメージを紹介。さらに日本人には少々理解しにくいRPSの「distinction」について研修する。



川村 賢一

1) 知っているようで知らない 素顔の英国

理解を超える複雑な国

英国は、正式には連合王国(UK)として知られるが、さらに、UKにもEUにも属さない王室直轄の自治国もいくつかあり、単一国家の日本人には理解しがたい「摩訶不思議な国」なのだ。

地理的位置も、ロンドン、北緯太と同緯度にある。写真や建築の設計において重要な「光」が、非常に軟らかく、とくに冬場の長い影は印象的だ。

英国を構成する4つの王国民は、明確な所属意識を持っている。(写真)

たとえば、サッカーなど、イングランド対スコットランドの試合となると、UK内国際試合と呼ばれ、巨人阪神戦とは比較にならないほど沸騰する。

また、実際の英国は、典型的な英国人イメージと異なり、かなりの他民族社会だ。とくに大都会では、遊んでいる子供たちの顔立ちも実に多様で、ニューヨークと大差ない。旧大英帝国の各地域や、多くの黒人が西インド諸島から、戦後の復興期に労働力として移住している。(写真)私の事務所のスタッフも7~8カ国の多国籍だった。

市内の住宅地には、ところどころに個人商店があり、その多くがインド人、アラブ人、中国人などの外国籍やその子孫の経営だ。ほとんどが年中無休で、夜遅くまで開いていて、英国人経営の一般商店が閉店する夜6時以降や、定休の日曜には大変重宝する。

シンプルな生活

日本では、イングリッシュガーデンが大変人気だが、都市部はほとんどがフラットと呼ばれる共同住宅住まいで基本的に戸建住宅はない。郊外でもテラスハウス(低層連続住宅)や、セミディタッチトハウス(2軒長屋)などが主流だ。私もテラスハウスの部屋貸しフラットに住んでいた。

一般的英国人の生活は、きわめてシンプルで、物も必要最小限しか持たない。非常に物を大切にしながら、所有にはあまりこだわらない。テレビや洗濯機さえ持っていない人も多く、その分レンタルサービスやコインランドリーなどが充実している。私も安いテレビをレンタルしていた。

また、各地に大きな古着マーケットがあり、いつも賑わっている。日本からも、掘り出し物を求めてディーラーが来るほどだ。

ロンドンには、東京ドームの100倍もの公園がいくつもあり、都市生活者は、個人で庭を持たない分、自然豊かな都市公園で、四季を通じて戸外生活を楽しんでいる。(写真)身近なところにも至る所に居心地の良い公園があり、初夏は日光浴の人であふれ、真夏はビキニの花が咲く。



(写真①)

(写真②)

(写真③)

パブは不可欠な社交場

英国というと、「パブ」と呼ばれる伝統的居酒屋が有名だが、どの町にもおいしい地ビールがある。

もちろん、アイリッシュのギネスや、ドイツ風のラガーもあるが、パブでは、英国独特のビール「ピター」をチビチビ飲むのが英国流だ。

若い連中のディスコパーティーを除けば、イギリス人が馬鹿騒ぎするのは、あまり見たことがない。スコットランド人やアイルランド人は、飲んで歌って馬鹿騒ぎするのが大好きで、その意味では、むしろ日本人に近い。

イギリスの飲酒感覚は、日本とかなり異なる。初めて事務所で働き始めたとき、昼休みに同僚にパブへ誘われた。昼食をとるのかと思いきや、いきなり大ジョッキでビール2杯もおごられ、そのまま何も食べずに仕事に戻ったのには驚いた。その午後は、頭がクラクラしてとても仕事にはならず、3時のティータイムに、みなサンドイッチで空腹を満たした。

応接室にはホームバーがあり、仕事でも来客との打ち合わせなどは、ワインとオードブルでもてなし、終わるとスタッフルームにも、しばしばお裾分けが廻ってきた。

パブは単なる居酒屋ではなく、家族みんなで出かける英国庶民にとって不可欠な社交場だ。(写真) 町の再開発でも、教会堂、マーケット広場とともに重要な3大要素で、それがワンパッケージではじめから計画される。

英国人のマナー

町中では、整然としたキュー(待ち行列)が有名だが、英国人の国民性の現れで、一人でも立派な列を作ると言われるほど。日本では、年末、松飾り売る屋台が出るが、クリスマス前には、英国でもクリスマス飾りの素材を売る屋台が出る。そんな屋台店でも整然と1列に並ぶのがイギリス人だ。八百屋で買い物するにも、列を作って順番待ちで、買うかどうか迷っているときでも、並ばないと相手にしてくれない。いつも列を乱すのは、ラテン系や外国人でちょっとしたトラブルになる。犬もよく躰られていて、きちんと並んで待っている。

(写真)

根強いクラス(階級)意識

英国は、クラス社会と言われ、アッパークラス(上流階級)からワーキングクラス(労働者階級)まで、5つのクラスがあるとされている。(写真)

ただ、世襲の上流階級を除けば、階級の変更は可能で、インドのカーストや土農工商とは違う。

アッパークラスは、約700人とされる世襲貴族や、一代貴族、紳士階級、土地所有者など、人口の数パーセントで、狩猟、乗馬などを楽しみ、いわゆる英国紳士のイメージを形成する。

約10%を占めるアッパーミドルクラス(中上流階級)は、大企業の社長、外科医、弁護士、軍隊幹部、学者、官僚など。

人口の約半分は、ワーキングクラスに属し、物作りに関わる職人や工場労働者、バスの運転手などの現業職は、このクラスだ。身なりも明らかに上のクラスとは異なり、一目で分かる。ただ、あまり卑屈な印象はなく、職人など、クラスに誇りに思っている人たちも多い。

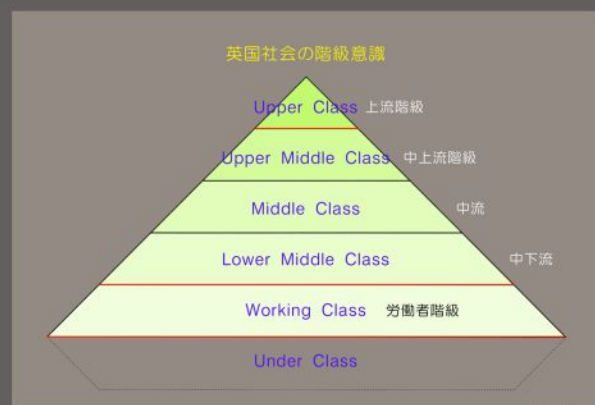
それらの中間が、ミドルクラスとロワーミドルクラスで、ミドルクラスは、中小企業の社長、大企業の中間管理職、普通の医者などで構成されるので、日本人が思っている中流よりもやや上と考えられる。ロワーミドルクラス(中下流階級)



(写真4)



(写真5)



(写真6)

は、下層のホワイトカラーで、大卒者は少ないと聞く。

アッパークラスの中には、業績により「ナイト爵」の称号を授与された人たちも多く、ビートルズのポール・マッカートニーのように、ワーキングクラスから一代貴族になった人も少なくない。

階級による文化の違い

スポーツでも、上流階級は、クリケットやポロを楽しみ、英国で大人気のサッカーも、実は労働者階級が中心だ。

当初、ロンドンの町中で、ほとんど英国紳士らしい人たちに出会わないのでとても驚いたが、ロンドンのシティ(世界的金融街)に行つてはじめて、それらしい群衆に出会った。

居酒屋も、パブとは別に高級な「サロン」と呼ばれるものがあり、ワーキングクラスは入れない。中には、一つのパブを2つに区切り、左からはパブで、右からはサロンという店もあった。入ってみると、基本的な作りは同じだが、サロンはゆったりと静かにお酒を楽しむ場所、パブは仲間と大声でワイワイにぎやかに飲んだり、ダーツなどのゲ



(写真7)



(写真8)



(写真9)

ームを楽しむところだった。

住宅地も、地域により大きく異なり、町にも階級差が歴然としている。ノッティンゲルやチェルシーなどの超高級住宅街には、同じテラスハウスでも明らかに高級感にあふれた街並み(写真)が続くが、キルバーン地域など、労働者階級や外国人移民が多く住む地域には、安フラットが並び、一部はスラム化していた。

若者文化やファッションでは、60年代流行ったモッズックなど、中流ファッションもあるが、世界にインパクトを与えたビートルスタイルやパンク(写真)など、多くの先端ファッションや音楽は、ワーキングクラスの若者が中心だ。

言葉や教育にも階級差

さらに、英語のアクセント(訛り)の違いでも、出身地と階級が分かる。かの有名なオーディー・ハップバーン主演の「マイフェアレディ」は、ロンドン下町のワーキングクラスの女性を上流階級に仕立て上げるというストーリーだ。(写真 旧青果市場)ロンドンの下町言葉コックニーは、独特の強いア

クセントと押韻スラング表現で、外国人にはとても歯が立たない。私の印象でも、相手の話が聞き取れる度合いで、ある程度の生い立ちが推測できた。

私立のパブリックスクールからオックスフォードというエリートコースの英語と一般庶民の英語には、かなりの違いがある。初めてロンドンに到着したとき、人々が話す言葉がまるで違う言語のように聞こえて、愕然としたことを覚えている。かつての「Queens English」とは、かなり上流階級のアクセントであり、現在の標準英語であるBBC英語は、ロンドン東部のミドルクラスのアクセントに近いと聞く。

鉄の女として勇名をはせたサッチャー首相は、ロワーミドルクラスの出身で、訛りの矯正には苦労したという話だ。

教育もクラスにより異なり、主にワーキングクラスを対象としたセカンダリスクール(公立中学)は、昼食以外は無料と聞く。小学校では、ノートや鉛筆も支給される。アップークラスの子供たちは、伝統的な私立のパブリックスクールに行くが、教育費は日本の3~4倍も高いという話だ。

強いアイデンティティ意識

強いアイデンティティ意識をもち、出身や所属にこだわる英国人は、読む新聞も異なる。イギリスでは、どの新聞を読んでいるかで、その人の思想信条、スタンスが明確で、「高級紙」のタイムズやデイリー・テレグラフを読む人は保守的な右派、インディペンデントやガーディアンを読む人は左派といった感じだ。ただ、もっとも人気のあるのは、いわゆる「大衆紙」で、中には日本のスポーツ新聞程度の内容で、ザ・サンのようにギャルのヌードグラビア頁で発行部数を伸ばしたものもある。

英国人は、何者であるかのアイデンティティにこだわり、年齢による序列にこだわる日本人との違いがある。新聞や雑誌での人物紹介覧には、「どこの出身でどのクラスか」が必須事項となっている。

美術館などの入館者のチェック項目には、性別、年齢、職業の他「民族性」と「クラス」があると聞く。

所属団体などもアイデンティティの重要な要素で、その人がどのような人物かが判断される。三宅会員の所属していた王立オートモビルクラブや王立写真協会の会員は、ステータスシンボルとなる。

こうしたイギリスのイメージを知った上で、王立写真協会の distinction とは何かを考えてみたい。



(編集後記)

第6回リレートークの内容は、なかなか端折ることが難しく、通常のニュースレターのボリュームに納まらず苦慮したが、後半(distinctionとは)を別紙添付資料とすることで対応した。今後の手引きとなれば幸いです。

(川村)

2) R P S のお 墨付き「distinction」

ニュー スレ ター 第7号の内容と一部ダブるが、今回は「distinction」(栄 誉ある 認定称号) 獲得に向けて、より具体的なイメージを紹介したいと思う。

日本人には 分かりにくい 概念

ここにきて、新メンバーが増えつつあり、支部にとってはうれしいことだが、日本支部の存続如何を問わず、「distinction」というR P Sのお 墨付きを得ることは、意味があるのでは...と思う。

ところが、「distinction」に当てはまる日本語がなく、辞書を引いてもなかなかピンと来ない。

ちなみに、一般用語の「distinction」を辞書で引くと、1) 区別、差別、2) 特質、特徴、3) 優秀性、卓越、著名、4) 殊勲、りっぱな成績、5) 栄 誉とあり、これらを掛け合わせたイメージというのが実感だと思う。

あらためてR P Sとは

これまでも時々語られていることだが、ここであらためて「R P S」と、その他多くの写真協会や写真クラブとの違いを確認したい。

「R P S」は、1853年(ペリー来航の年)に設立された世界最古の歴史と伝統を誇り、写真家だけでなく、研究者や技術者など、写真に関わるあらゆる分野を包括するほとんど唯一の協会だ。英国には、他にプロ写真家のみで構成されるB I P P (英国写真家協会)という団体もあるが、王立ではない。

ロンドンでR P Sの写真展と出合ったとき、話を聞いて驚いた。これほどアイデンティティにこだわり、排他的な団体も多々あると聞く中で、これほどの伝統のある協会が、「あなたが誰であるかは全く関知しない。プロアマはもとより、人種も国籍も、身分も問わない。」「唯一、あなたがどんな写真を撮るのか、どのように写真の発展に貢献するかだけが、我々の関心事だ。」と、誇らしげに話していた。写真関係者に広く開かれた「R P Sの精神」に感動し、即日入会の手続きをとった。

R P S の distinction とは

R P S 本部のHPを検索すると、「the Society's Distinction」挑戦への招待という紹介がある。ここでいう「distinction」は、様々な団体で与えられる称号の一つで、技術認定でもあり、名詞にも記載する。人によっては、様々な団体のdistinctionをいくつも記載している人もいる。とくに、プロの写真家の多くが複数の団体に所属し、R P SとB I P Pに所属している人は少なくない。

R P Sの「distinction」は、国際的なステータスシンボルであり、栄 誉ある 称号として、日本でいう「正会員」の意味に近いと考えている。

さらに、高木会員のトーク(第3回)に紹介されているように、60年代以前、R P Sの会員となるには、作品審査合格が条件だった。

1970年頃、R P Sが民営化され、本部のHPにも紹介されているように、「誰でも参加できるユニークなソサエティ」となった。

ただ、一般メンバーは日本で言う「会友」という印象が強

い。当初、日本支部では、会員をR P S 正会員と呼ぶことがあり、私は違和感を感じたが、現在はただ「R P S 会員」と呼ぶことに統一していると理解している。「distinction」の取得には、一定の要件を満たす作品や研究成果の提出が求められている。

「distinction」3つのランク

「distinction」には、LR P S、AR P S、FR P Sという3つのランクがあり、私の私的イメージを添えてお話ししたい。

まず、LR P S (Licentiate) は、「準会員」にあたり、約3000名が取得している。これは、「写真の基礎的な技術と表現力の認定」であり、写真の専門教育を受け、優秀な成績を納めたものには、無条件で授与される。ちょうど、大相撲で学生横綱が幕下付け出しとなるのに似ている。

次の、AR P S (Associate) は、「正会員」に相当し、1500名~2000名程度ではないかと推測しているが、その多くがプロ写真家だと聞く。「より専門的なハイレベルの技術と表現力と独創性の認定」であり、AR P S以上がシニアメンバーとして位置づけられている。大相撲でいう「関取」に相当すると考えられる。

さらに「上席正会員」と呼べるFR P S (Fellowship) があり、わずか800名弱と言う狭き門だ。ここでは、「並はずれたレベルの技術や表現力の上に、より高い独創性」が求められる。大相撲で言えばの「幕内」に相当するイメージだ。

これらとは別に、Honourable FR P S「名誉正会員」があるが、これはある種の勲章のようなもので、写真界に対して際立った貢献や、特別の業績を上げたものに対して上から授与される名誉のタイトルだ。これはまさに大相撲の「大関/横綱」に相当すると考えてよい。

私の「distinction」取得体験

私の「distinction」取得体験を紹介すると、入会後すぐLR P S (Licentiate) に応募し、運良く1回で合格できた。合格するとすぐ書類が届き、プロフィールを書いて送ると、地方新聞で紹介された。

驚いたことに、LR P Sの授与を受けたことで、建築事務所のポストからオフィシャルフォトグラファーとして、建築写真の撮影を頼まれるようになり、平日は建築の設計、週末は建築写真家という生活が続いた。ポストや友人の紹介で、インテリアデザイナーやデベロッパーの建築写真も頼まれた。

その後気をよくして、AR P S (Associate) に応募したが、合格までには3年かかった。合格したのは、応用写真部門(建築写真部門)での作品だった。

合格後は、送られてくる郵便物などの氏名の後には、すべてLR P SやAR P Sの敬称タイトルが明記されている。



R P S の考え方

Licentiate'ship の公開審査は、事前に傍聴券を求めることで傍聴できる。審査の傍聴で明らかになった R P S の考え方は、提出したポートフォリオ全体を通して、その作者が「何を表現し、何を伝えたいか」が明確であることを重視していることだ。

そのときの応募者の中には、フォトコン入賞作品を揃えた人もいたが、一枚一枚の写真の見事さにもかかわらず、ポートフォリオとして何を表現し、何を伝えたいのかが分からないとして、認定を受けられなかった。

また、私の場合、グレーバックのパネルと、白バックのパネルで、写真の展示レイアウトも指定したが、そのツートンカラーのプレゼンテーションが、思いの外好評だった。

F R P S (Fellowship) の評価では、とくに独創性が問われる。ある勉強会で、「私の作品は、F R P S のレベルに達しているか知りたいのですが...?」という質問者に対しては、「そういう質問が出るうちは、まだその域に達していないと思って間違いありません。」というのが指導者の回答だった。

カテゴリ - 別分科会

R P S には、カテゴリ - 別に 10 の分科会があり、F R P S および A R P S の審査応募は、それらのカテゴリ - 別に応募することになっている。カテゴリ - については、本部 H P に詳しく紹介されている。

Applied and Professional
inc. Documentary and Visual Journalism
(応用写真: 広告、ファッション、舞台、建築、報道など)

Audio Visual Sequence and Photo Harmony
(スライドショー形式の写真芸術)

Contemporary (現代写真)

Moving Image (動画)

Natural History
(自然博物写真: 動物、昆虫、気象、天体など)

Printing (印刷技術)

Research, Education and Application of Photography
(研究、教育、写真の応用)

Science (科学写真、医学写真、...)

Travel (旅行写真、紀行写真)

Visual Art (視覚芸術写真)

応募要項概要と審査ポイント

具体的な応募要項については、本部の H P (英文) で参照でき、「the Distinctions Handbook」(全 47 頁) に詳細に記載されている。

まず、L R P S への応募要項については、動画系分野と教育分野以外の、一般的なスチール写真については、ひとまとめでカテゴリ - 分けはない。審査料は £ 50 で、スチール写真の提出作品は、「10 枚組のポートフォリオ作品」だ。

A R P S (Associateship) への応募は、審査料 £ 75、スチール写真の提出作品は、「15 枚組のポートフォリオ作品」で、60 年代以前の入会審査と同じだ。

さらに、F R P S (Fellowship) への応募については、審

査料 £ 100、スチール写真の提出作品は、「20 枚組のポートフォリオ作品」とされるが、プロの実績ある写真家以外、いきなり応募するのは事実上難しいようだ。

スチール写真の提出方法は、いずれの場合も、プリントでも、リバーサルでも、デジタルデータでもよい。写真のサイズは、プリントの場合、10"x8" - 20"x16" (4 切 - 半切程度) が推奨され、とくに高さは、審査室のラックの高さの関係で、22" を超えないこととされている。デジタルイメージの場合は、1,400 x 1,050 pixels (T I F F 圧縮なし) のサイズで、C D により提出する。

今後に向けて

R P S 本部による権威付け「distinction」は、個々の会員にとっても、支部にとっても、発展への力になると思う。対外的にも説得力があり、「distinction」をとるために入会したいという人が増えることを望んでいる。

将来的にタイトル保持者の人数が増えれば、R P S 本来の流儀通り、支部写真展の名前の後にも、それを記載することができる。これは来訪者に、さらなる興味を持たせる手段になりうる。

また、とくにアマチュアやセミプロの場合、技術と表現力について一定のお墨付きを受けることは、大変励みになり、対外的にもアピールできる。ちなみに日本にいる R P S 会員は、全国で 70 人程度で、数年前のリストでは、F R P S が 1 名、A R P S が 4 名だった。



THE ROAD TO ASSOCIATESHIP

Steve Roberts ARPS discusses the route he took to gaining his Applied and Professional Associateship in May, with a portfolio of monochrome photographs on abandoned Cornish mines



(本部 R P S ジャーナルに見るアソシエイト取得例)

具体的な手続きについては、今後の課題としても、ここで「distinction」挑戦の具体的なイメージができれば、一歩前進ではないでしょうか。さらに、現実的な「申請手続き」などについても、今後できるだけ協力しますので、ぜひ皆さん挑戦してください。

(川村 賢 - A R P S)

